

古代史探究の面白さと難しさ

——古代とつながる今の地を訪ねる

群馬大学名誉教授 相澤省一



1. 『火の路』を読む

定年を迎えた2014年、高校の4年後輩であるN君から松本清張の『火の路』を読むように勧められた。推理小説の形をとってはいるが、清張氏独自の（難解な？）古代史観が随所に出てくる本である。小説は「酒船石」を舞台に始まり、崇神天皇陵に移る。読み進めると史跡が次々に出てくる。なかでも「益田岩船」が大きく扱われ、何に使われた施設かと謎解きの話が進む。氏はこれを古代ベルシャの拝火教（ゾロアスター教）と関係がある石造物ではないかと推理を進め、イランへ

と謎解きの旅に出る……。読んで、清張氏の古代史観がすべて理解できたわけではないが、史跡が次々に出てきて興味深く、面白い。読後しばらくした9月半ば、小説に出てくる史跡を巡る旅に家内と出かけた。

2. 奈良県内の史跡巡り

あちこちとずいぶん歩いた。

崇神天皇陵から始め、大神神社、箸墓古墳、纏向の古墳及び遺跡、石舞台、酒船石、亀形石造物、飛鳥寺（大仏）、甘樫丘、伝飛鳥板蓋宮跡、益田岩船、飛鳥資料館（須弥山石など展示）、橘寺、亀石、鬼の俎・鬼の雪隠、

天武・持統天皇陵、欽明天皇陵、吉備姫墳墓、法隆寺、薬師寺（東塔は解体修理中）、唐招提寺、平城宮址（大極殿、朱雀門）、東大寺（二月堂、正倉院、大仏殿）、興福寺（国宝館）、猿沢池で終わる。小説にない史跡もいくつか見て回った。

「益田岩船」はバス停から少し歩き、見晴らしのきかない丘陵の斜面をジグザグにしばらく登ったところにあった。1年に一体何人の観光客が来るのだろうかと思うような場所である。巨大な石に登って雨水の溜まった四角の凹みの大きさを計ったりしたが、下で見ていた家内は蚊に喰われて大変だっ

たらしい。

偶然だがこの史跡巡りの一か月後、10月15日にNHK番組『歴史秘話ヒストリア』で「日本にもあった！ 謎の巨石文明」目覚める飛鳥「石の女帝」が放送された。女優の高島礼子さんが益田岩船をはじめ、私どもが見て回った石造物のほとんどを訪ねている。それによると、益田岩船は斉明天皇と娘の間人皇女の合葬墓として作られたが、途中で石にひびが入ってしまったため、製作中止になってしまったのではという。そして二人はその後作られた牽牛子塚（古墳）に葬られた



益田岩船（2014年9月17日撮影）

のではないかと解説があった。清張氏の推理とはまるで違う。しかしこちらの方が説得力があると思った。

箸墓古墳では見学を終えようとしたとき、車がすぐそばに止まって人が出てきた。古墳の説明をボランティアで行っている方らしく、20〜30分ほど詳しく説明してくれた。法隆寺の西円堂前でもやはりボランティアらしき人がおり、説明してくれた。その上、勧められて柿を食べたが、鐘は鳴っていなかったように思う。薬師寺や唐招提寺などは高校の修学旅行で来た（撮った写真がある）が、まるで憶えていない。甘樫丘に登ったとき、家内は初めてと言っていたが、後で写真を見たらやはり修学旅行で来ていたという。半世紀も前のことである。

宿泊には民宿やビジネスホテルを利用したが、記念にと最後は奈良ホテルに泊まった。

3. 歴史学ではなく化学へと進む

もともと歴史は好きだった。大学では理工系に進んだが、高校では「世界

史」と「日本史」の授業を真面目に受けた。3年生のとき、クラスで「日本史」の試験が4番か5番だった記憶がくすかにある。大学受験のとき、文学部の史学科に行きたいと思った。しかし化学も好きで、工学部の応用化学科に進み、卒業後も分析化学・地球化学を専門とする教育職に就いた。

その後65歳で定年を迎えるまで「歴史」の勉強とは無縁である。30歳ぐらいの独身時代に、いつか時間ができたら読もうと、当時予約出版だった「岩波講座」の『日本歴史』（黄色の箱入）と『世界歴史』（薄い青色の箱入）を購入した。いずれも30冊くらいあり、本箱の中で「存在感」があった。しかし、ページをめくった記憶はない。

それでも出張で仕事が終わった後、近辺の史跡を見て歩くことはあった。帰りに京都の嵯峨野に寄ったり、大宰府政庁跡や吉野ヶ里遺跡などに足を延ばしたこともあった。1月の寒い夜に仁徳天皇陵の外周を歩いたこともある。しかし、初めから史跡巡りを目的に出かけることは現職中にはなかった。

50代後半くらいからであろうか。過去を見る時間の感覚が変わってきた。若い頃よりも過去が近づいてきた。自分で生きてきた期間を時間のスケールにして現在から過去までの時間を推し量るようになったためだろう。古代史の舞台とはどのようなところか。その地に行つて史跡を見、周りの景色を眺めてみたいという思いが強くなった。定年の年にたまたま『火の路』を読んだことは、私を古代史の世界へ誘う大きなキッカケになった。

4. 古代史の勉強会へ入会（初めはまったく理解できない）

その後、先のN君に誘われて古代史の勉強会に参加した。新宿で月初めの土曜日に会員の一人かふたりが日頃の勉強成果を発表する集まりがある。初めの頃はちんぷんかんぷんだった。話に出てくる固有名詞がわからない。後ろの席に座る友人のT君から「相澤はいつも居眠りしている」とよく言われた。それでも勉強会は会の後に旧友たちと歓談するいい機会でもあって、群

馬から参加し続けた。

そのうち、古墳時代に榛名山の噴火で埋もれた「中筋遺跡」などを巡るバスツアーがあった。このとき配布された案内書に、埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土した鉄剣に刻まれた辛亥年は471年である、との記述があった。これに気づいた同行のN君は「大変だ!」という。理由を聞くと、勉強会の主なメンバーは鉄剣の辛亥年は531年と言っているからだと答えた。これが私が古代史を勉強するようになった端緒である。

2020年の2月の勉強会で「炭素14年代測定法」でわかったことかわらないこと——さきたま稲荷山古墳鉄剣銘文の辛亥年」と題して話をした。鉄剣に刻まれた辛亥年は471年と確定したわけではない。ただし531年と決まったわけでもない結論し、この辛亥年が471年か531年のどちらになるかはこれから調べて1年後に報告しますと私は話を締めくくった。ところが、この私の話を最後として、翌3月から勉強会は新型コロナウイルス

イルスの感染拡大のために休止となる。勉強会は次々に順延となって、1年後の予定が丸々3年後（2023年5月）になってしまった。しかしその間、辛亥年の調べだけでなく、古代史の様々な史料や著書などに目を通す毎日となり、古代史を勉強するいい機会になった。

5. 辛亥年は471年か531年か、獲加多支鹵大王は雄略天皇か欽明天皇か

稲荷山古墳出土の鉄剣についてはご存知の方も多いと思われる。鉄剣は国宝に指定され、室素雫囲気のケース内に入り、埼玉県行田市にある「さきたま史跡の博物館」で常設展示されている。鉄剣自体は1968年に発見された。しかし錆がひどく、文字があることはわからなかった。博物館は1978年、鉄剣は錆による劣化がひどいので奈良の元興寺文化財研究所に保存のための修理を依頼する。その修理過程で文字が発見された。銘文は金で象嵌されており、X線撮影で115文字が浮

かび上がった。京都大学の岸俊男教授らが解説し、埼玉県教育委員会が1978年9月19日に発表した。ただし原文に読点はなく、「獲」は草冠がない。

(表) 辛亥年七月中記、乎獲居臣、上祖名意富比埵、其兒多加利足尼、其兒名弓已加利獲居、其兒名多加披次獲居、其兒名多沙鬼獲居、其兒名半弓比(裏)其兒名加差披余、其兒名乎獲居臣、世々爲杖刀人首、奉事來至今、獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也

読みは次のように発表されている。

(表) 辛亥の年七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兒、(名は)タカリのスクネ。其の兒、名はテヨカリワケ。其の兒、名はタカヒ(ハ)シワケ。其の兒、名はタサキワケ。其の兒、名はハテヒ。

(裏) 其の兒、名はカサヒ(ハ)ヨ。其の兒、名はヲワケの臣。世々、杖刀人の首と爲り、奉事し來り今に至る。

ワカタケ(キ)ルの大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也

我が国内には4、5世紀の文字史料がほとんどない。鉄剣に刻まれた115文字の銘文の解釈は我が国の古代史を解明する上で大変重要な意味を持つことは誰の目にも明らかである。当時、大きなニュースになった。

解明すべき事柄はたくさんあるが、特に注目されたのは冒頭にある「辛亥」年がいつか、それから「獲加多支鹵大王」が誰をさすのか、である。

辛亥(年)というと、世界史で教わった中国の辛亥革命(1911年)を思い浮かべるが、鉄剣の辛亥年で該当する(だろう)年は471年から531年である。『日本書紀』の紀年は年代が遡ると実年代から大きく乖離する。しかし安康天皇あたりまでは大きな隔たりはないとされる。471年は雄略天皇在位年である。一方531年は『日本書紀』の紀年とは少し異なり、

昔から欽明天皇即位年説がある。

銘文発見以前、4、5世紀の我が国の歴史は「好太王碑」(現在は「広開土王碑」が一般的な呼称らしい)の碑文と中国の『宋書』に書かれた倭王武の上表文をもとに解釈されてきた。

好太王碑文(414年建立)には、

(前略)百殘、新羅舊是屬民、由來朝貢、而倭以辛卯年來、渡海破百殘、□□新羅、以爲臣民。(中略)十年庚子、教遣步騎五萬、往救新羅、從男居城至新羅城、倭滿其中。官兵方至、倭賊退。(後略)

と書かれており、『宋書』の上表文(478年)には、

封國偏遠、作藩于外、自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧處。東征毛人五十五國、西服眾夷六十六國、渡平海北九十五國、(以下略)

とある。

この二つの史料からは次のように読

み取れる。

4世紀後半に倭国は朝鮮半島に兵を進め、高句麗軍と戦った。そして5世紀後半には倭国は東（関東）西（南九州）の国々を支配下に置き、朝鮮半島にも進出していた。

銘文の辛亥年を471年、獲加多支鹵を雄略天皇、倭王武は雄略天皇とすると、それは上記の古代史説を裏付ける極めて重要な史料になる。しかし当時、これに反対する説をとっていた研究者が少なからずいた。独自の古代史観を持つ人たち、それから唯物史観に基づいて、国家の成立には律令制度の確立が必要でそれは7世紀とする人たちである。これらの人たちは自説をひっこめない。上記の古代史説を是とする人たちと論争になった。3年の間、論争に係わる論文や解説記事、著書に可能な限り目を通した。大変な数である。

詳しく書くことはできないので結論だけ述べるが、3年間の勉強に基づけば、辛亥年を531年、獲加多支鹵大王を欽明天皇あるいは地方豪族などの長とする説には無理がある。辛亥年は

471年、獲加多支鹵は雄略天皇とする説の方が分がある。

6. 牽強付会

3年の間にいろいろなことを学んだ。

その一つが「牽強付会^{けんきやうふかい}」である。定年になるまでこの言葉を知らなかった。理系の書ではまず出てこない（と思う）。新聞や雑誌、普通の本もそれなりに読んだつもりなので、どこかで目にはしたかもしれない。しかし頭に入らなかった。辞書を引くと「自分の都合のいいようにこじつけること」（『広辞林』第6版、1983年）とある。その後、山村聰著『釣りひとり』を読んでみると、牽強付会に「こじつけ」とルビがふられていた。なるほどと納得した。

理系では「捏造」の言葉がある。実験データを都合のいいように改竄する、あるいはないものがあるかのようになり出すことである。自分の説と明らかに合わない実験データが得られたとき、それを自説と整合させるのは至難の技である。自説にこだわる場合、得られたデータを自説に合うように改

竄するか、ないデータを作り出すことになる。絶対にあつてはならないことだが、ニュースになることがときにある。

古代史学では理系での実験データに相当するものは古文書や遺跡、遺物であろう。その改竄は極めて難しい。あるとき、それまで主張してきた自分の歴史観と合わない文字史料が発見されたとする。自説を曲げないとすれば、その文字史料を自説になんととしても“整合”させなければならぬ。鉄剣の銘文解釈のときにもそれが見られた。当時鉄剣の銘文出現に困った人物と名指しされた人たちが、それまでの自説を撤回したのは私の知る限り一人だけである。他の人は自説と辻褄が合うように銘文を解釈し、これまでの自説に誤りはないと主張した。その解釈には無理がある（牽強付会？）と私には思えた。

7. 倭王武

先にも記したが、中国王朝の正史『宋書』には478年に「倭王武」が上表文を皇帝に奉ったとある。この「武」の漢字表記について、古代史研究

者は、それは雄略天皇の幼武（ワカタケル）の「武」であり、遣使が上表文を奉ったときに我々の王は「武」と先方に伝えたのであろうと著書に書いている。しかし5世紀当時の「ワカタケル」は鉄剣の銘文によれば「獲加多支鹵」である。「武」を使っているのではない。

『宋書』に出てくる倭の五王（讃、珍、済、興、武）の特定（比定）は古代史の難問中の難問とされ、未だに確定していない。ところが「武」は雄略天皇で多くの研究者の見解が一致している。その理由は先に述べた通りであるが、納得がいかない。素人考えであるが、『宋書』が「武」と表記した経緯を私は次のように推測した。

478年の「上表文」の内容、それに加えて、遣使者によるワカタケル大王の人物像の説明から、宋朝の高官（文官）が倭王を『宋書』に「武」と表記したのではないか。

(1)雄略天皇は生前、ワカタケ（キ）ルと称していた。

(2)5世紀の倭国では、ワカタケ（キ）ルの漢字表記は「獲加多支鹵」であ

る。武の表記はまだない。

(3)帝への上表文の内容と遣使者による倭王の人物評に「勇ましき」を見た宋の高官（文官）が倭王の名を『宋書』に「武」と表記した（中国語も武は勇ましいや勇猛の意）。

(4)『日本書紀』の編纂者は『宋書』を見て、雄略天皇に「武」の漢字が使われているのを知った。そこでワカタケ（キ）ルの「タケ（キ）ル」に「武」の字を当て、「幼武」と表記した。

『日本書紀』完成の720年以前に、遣隋使と遣唐使は600年から717年（帰国718年）までに計14回派遣されている。遣使は帰りに中国の仏教関係の經典や書籍とともに史書を持ち帰っている。藤原佐世が891年頃に編纂した『日本国見在書目録』には、他の史書とともに『宋書』が名を連ねている。『宋書』は500年頃には全巻完成している。720年以前の遣使によって『宋書』が日本にもたらされた可能性は十分にあるのではないだろうか。

私の説の弱点は、他の讃、珍、済、興について、その漢字表記に明確な理由

付けができていないことである。史料に乏しい古代史の解明はなかなか難しい。

8. 3年間の勉強で次の言葉が印象に残った——「歴史を研究するものは長生きしなければいけない」

1960年代から70年代にかけて、江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」は一世を風靡した。ご記憶の方も多いと思う。その江上氏が、ある雑誌でのインタビューに答えた言葉がある。

「私は長生きしなければいけないと思ったことがあるんです。私の先生だった濱田耕作先生が「学者は長生きしなければいけない」と言われたんです」と始める。次いで、英国の歴史学者の言を師の言葉を借りて「60歳や70歳の人はまだまだ歴史を振り返って見るような余裕はない。80歳や90歳になって、初めて自分の生きてきた時代全体がわかる。だから長生きしなければいけない」と江上氏は紹介した（『創刊100号にあたって』『東アジアの古代文化』100号、1990

年、2（5頁）。

江上氏は96歳で亡くなり、師の言葉を守った。しかし師の濱田耕作は京都帝大総長職にあった1938年に57歳で病死している。

9. 古代史の舞台の今を訪ね、 楽しみたい（温泉巡り）。

古代史の勉強は2023年5月の発表で一休みである。その後、故あってダグラス・マッカーサーの戦中戦後史を調べることになったことがその理由である。しかしそれだけではない。勉強よりも古代史に登場した舞台の今（史跡）を旅するほうが楽しい。残された時間もたくさんあるわけではない。

行きたいところは数え上げればきりがない。代わりに、これまでに古代（史）に係わりるところは何処へ行ったのだろうか、記憶を思い起こした。先にいくつか記したが、それ以外にである。

百か所の温泉地を巡りたいと出かけ、これまで89か所の温泉に浸かった。文人墨客が入った温泉は結構ある。古代史と関係ある温泉はあるのだろうか。

か。調べると、有馬温泉（有間湯）には舒明天皇と孝徳天皇が行幸し、南紀白浜温泉（紀温湯、牟婁温湯、武漏温湯）には斉明、持統、文武の3天皇が行幸している。『日本書紀』（斉明天皇紀）には、飛鳥の地で捕らえられた有間皇子が紀温湯に護送されて中大兄皇子の尋問を受け、藤白坂で絞殺される（悲劇の）物語が詳しく書かれている。それに道後温泉（伊豫の湯）がある。允恭天皇の長子、木梨之輕皇子の流刑地とされる。また聖徳太子が訪れたことを示す碑文が『伊豫国風土記』逸文に残されている。斉明天皇紀に「御船泊于伊豫熟田津石湯行宮」とある。これも道後温泉だろうか。

『出雲風土記』には玉造温泉（川の辺に出で湯あり。出で湯のある所、海陸を兼ねたり。神の湯と言へり）、『豊後風土記』には別府温泉（速見の湯）、『肥前風土記』には現在の嬉野温泉と武雄温泉に比定される温泉、『撰津風土記』には有馬温泉（鹽の湯）が記されている。『伊豫国風土記』は、速見の湯を伊豫の湯へ下樋（海底導水

路？）を通して持ってきて、病の宿奈比古那命に浴せるとその病が治ったとする逸話も載せている。

出かけたことのない温泉は、大宰府に赴任した役人などが入ったと言われる「次田（あるいは「すきた」）の湯」（現在の二日市温泉）である。728年大宰府に帥（長官）として赴いた大伴旅人は、赴任中に妻を亡くした。その妻を偲んで湯の原（次田の湯）で詠んだとされる歌が『万葉集』に巻61961番歌として収録されている。

湯の原に鳴く蘆鶴（あしたづ）は吾が如く妹に恋ふれや時わかず鳴く

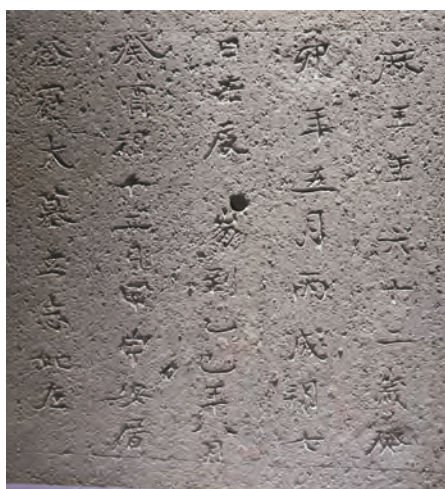
番外編がある。長崎県の「壱岐」には「湯本温泉」があり、応神天皇が生まれたとき、神功皇后が産湯として使った温泉であると、ある旅館の脱衣場に書かれていた。ただし真偽のほどは定かでない。

10. 武寧王陵に眠っていた墓誌

2019年4月、かつての百済の

地、韓国忠清南道公州市にある宋山里古墳群の武寧王陵に出かけた。近くの国立公州博物館に出土品が展示されており、その中に石板に刻まれた武寧王の墓誌があった。亡くなった年が癸卯年（523年）と明記されている。『日本書紀』の記述とも一致し、我が国の古代史研究のための第一級史料である。1971年の発見であるが、密閉された墓室内にあったため風化を免れ、1500年の時を経ても、刻んだ漢字が明瞭に読める。それを目の当たりにした。

11・ペルシャ戦争の古戦場跡を ちらっと見る



武寧王の墓誌

2019年9月、マケドニアからギリシャにかけて旅行した。観光の目的地ではないが、移動の途中、「テルモピレー」を通った。「ペルシャ戦争」の有名な古戦場である。先述の濱田耕作が書いた随筆のなかに「希臘テルモピレーの温泉」がある。温泉水が湧き出ていることでも有名である。

レオニダス率いる少数のスパルタ軍部隊がクセルクセス率いるペルシャの大軍を迎え撃ったところで、当時（紀元前480年）は道路のある海岸線まで山が迫る狭隘の地で、ギリシャ軍の防御陣地として最適の場所だった。しかし、現在は海岸線沿いに土砂が堆積し、海岸線は山肌から離れていた。海岸線から陸地側に入ったところにある舗装道路をバスは走る。しかもツアー旅行のコンダクターからテルモピレーの戦いの「ガイド役」を急に頼まれて断ることもできず、マイクで説明、史跡付近をよく見る余裕がなかった。

思い起こすと、ペルシャ戦争にまつわる場所へは二十数年前にも出かけている。石油貯留岩の調査で、ペルシャ

の地、イランに調査メンバーの一人として出掛けた。

テルモピレーの戦いの150年後、紀元前330年、アレキサンダー大王がペルシャの都（ペルセポリス）へ攻め込み、都から退却するペルシャ王のダレイオスを捕えようと、都から北上、現在のテヘランの東方まで追撃したことがある。『アレクサンドロス大王東征記』を読むと、そのとき大王が追撃で通ったと思しき道路を我々は通った（らしい）。当地で砂漠の中を通る道路は数少なく、地図を見て間違いないだろうと思った。

2001年8月末、我々はペルセ



イラン・アバデー付近の岩石砂漠（2001年8月29日撮影）

ポリスの北方約150kmのアバデー(Abadeh)に宿をとり、ザグロス山脈の山中で地質調査と岩石試料の採取を行ったが、ペルセポリスの遺跡を見る機会はなかった。

12・古代史の史跡と戦争との関係——古戦場を見たい、しかし……

人類の歴史は戦争の歴史でもある。幾多の戦いで命を落とした名もない戦士は数知れない。戦士でなくても戦争で命を落とした人がたくさんいる。古戦場や攻め滅ぼされた史跡を訪れて昔を偲ぶのは、本来、戦さのない平和なときにこそ相応しいものであろう。しかし現在もウクライナ戦争など戦争や紛争が後を断たない。

先ほどマッカーサーのことを調べていると書いた。マッカーサーは晩年(82歳)、1962年5月12日にウェストポイントにある陸軍士官学校で士官候補生を前にスピーチし、最後に次のように述べた。

諸君は戦争屋(war monger)になつてはいけない。兵士は他の誰よりも平和を願ひ、祈つてゐる。なぜなら、戦いで負傷し、重い傷を負つてそれに苦しまなければならぬのは兵士たちだからである。しかし、私たちの耳にはプラトンの不吉な言葉「死者だけが戦争の終わりを見る」が常に鳴り響いている

“Only the dead have seen the end of war.”

これは、人は生きている限り、戦争の終わりを見ることはない、言い換えれば、いつの世になっても戦争はなくなる、ということを表わす言葉と理解される。プラトン(紀元前427〜紀元前347)はアレキサンダー大王(紀元前356〜紀元前323)と時が一部重なり、戦争が絶えなかった時代を生きた。そのときの言葉である。それが2千数百年後にも使われ、さらに今日でも国際情勢がそれを実証している。

現実には厳しい。プラトンの言葉は我々に重くのしかかる。しかし、いつ

の日になるかわからないが、戦争のない平和なときがきて、古戦場を訪れる旅ができるようになることを乞い願うものである。

いろいろ考えると出かけるところに迷ってしまうが、近隣にある古墳を訪ね、古代の史跡巡りを再開したい。小学校6年のとき、遠足で「吉見の百穴」に出かけた。もう一度行ってみようと思う。

筆者略歴(あいざわ・しょういち)

1971年群馬大学工学部応用化学科卒業、1973年同大学大学院工学研究科修士課程修了、同大学工学部で助手、助教授、准教授を経て教授、2014年定年退職。同年から2019年まで放送大学群馬学習センター客員教授。

専門：分析化学、地球化学。河川水や温泉水、石灰石などの化学堆積物、メタンハイドレートを含有する海底堆積物の化学成分分析、土壌中の放射性セシウムの分析を行う。